

英国における中国の映像

——主として17世紀前半までの文学作品に

あらわれた中国に対する英国の関心について——

西 尾 朗

Confucius observes that it is the duty of the learned to unite society more closely, and to persuade men to become citizens of the world....

— Oliver Goldsmith —

英文学の作品の中で中国の影響が最も著しくあらわれたのは18世紀においてである。Arthur Murphy の劇に、また Goldsmith の散文に大きく表面に浮かび上った中国は、当時の文壇に『中国趣味』という新しい流行を生み、多くの作家の想像力を東洋へとかりたてた。だが、このような文壇における中国熱は一朝一夕に湧き起ったものではない。勿論、当時、Voltaire をはじめ大陸作家の影響や、合理主義にもとづく進歩的な社会思潮、すなわち啓蒙主義などの影響が、直接、中国受容に都合のよい条件を作り上げたことは事実であるが、われわれはその前提として中世末からつづいた英・中両国間の歴史と、その中ではぐくまれた中国に対する英国の強い関心を見逃がすることは出来ない。

本稿は、かかる中国に対する英国の関心がどのようなものであったか、17世紀前半までの文学作品を概観しながら、その関心の跡をさぐろうとするものである。

× × × × × × × × × × ×

英文学の作品に、はじめて中国の名を刻んだのは John Mandeville である。彼の有名な「旅行記」*The Travels of Sir John Mandeville* は、もともと、聖地エルサレムに詣でる巡礼のガイドブックとして書かれたものであるが、肝心の聖地案内に関する記事はこの本の前半で終わり、後半は、もっぱら、およそ聖地巡礼とは縁遠い、印度、東南アジア、中国といった、いわゆる東洋諸国の

地誌、風俗、習慣などの紹介にあてられている。

さて、この中でてくる Mandeville の中国描写は、南支から北支へ旅行した際、彼が見聞した興味ある事柄を、気のむくままに書き記したものである。この旅行で、とくに彼の注意をひいたのは、中国全土を支配する大汗 (the Great Caane) の存在であった。野人的な素朴さと東洋の智慧を兼ね備え、茫漠たる東洋の新天地を思いのままに支配する大汗の姿は、ヨーロッパという狭隘な土地の上で、しかも中世という杓子定規な教条主義にしばられて生活していた著者 Mandeville にとっては、とうてい想像することが出来なかった人物であったに違いない。彼にとって大汗は中国のすべてであり、また中国を代表する人物でもあったようだ。彼は大汗の豪壮な生き方と傑出した人格に強い魅力を感じ、憧憬と尊敬の念をまじえながら、次のように述べている。

天の下に大汗ほど偉大で、勢力絶大で、そしてまた、富裕な君主は存在しない。高インドの皇帝であるプレスター・ジョンも、バビロンのスルタンも、ペルシャの大帝も、大汗にはおよばないのである。そうした人々も大汗にくらべると、勢力といい、高潔さといい、富力といい、物の数ではなく、大汗はこの現地のあらゆる王侯君主を凌駕している。¹⁾

豪壮な宮殿、けんらんたる宮廷生活、大汗の人徳を偲ばせる数々の逸話。Mandeville は、彼の中国紹介の記述のほとんどを割いて、この大汗の偉大さを称えている。そして、テーマの中心を常に大汗の生活にもとめ、そこから国土、国民につい

ての記述を展開している。まず彼は、

カタイ〔シナ〕の国は广大で、美しく、肥沃な国土でりっぱな商品にあふれている。だから、毎年、商人たちが香料その他の商品を買いに、ほかの国よりも足繁くこの国へやってくる²⁾

と、大汗の治める中国の豊かな経済力について述べ、その住民については、

この国には乞食もいなければ、貧乏人もいない。また住民は顔色が青い点をのぞいては、たいそうきれいである。そして、男たちは毛のまばらな、薄いひげをはやしている。というのも、ひとりの男のひげには毛が50本しかないからである。まるで豹か猫かのひげのように、そこかしこに一本ずつ生えているだけである³⁾

と、その裕福な経済状態や、黄色人種特有の皮膚の色、また、欧米人にくらべて毛の薄い東洋人の特色をユーモラスな筆致で書き、中国人の性質にふれて、

住民はすべて主君に対し忠順で、同胞のあいだで争うようなことは決してしない。盗人もなければ、泥棒もなく、だれもが他人を愛し尊崇している⁴⁾

と、その従順な性格を披露している。別な箇所では、彼はさらに中国人の知能がすぐれていること、⁵⁾ また男女を問わず武芸に秀いで、戦場では勇猛果敢な戦士であること⁶⁾ などを指摘、中国民族の優秀性を称えている。

以上、わずかな引用からもわかるように、Mandeville の中国描写の目的は、君民一体となって築く平和な、しかも秩序ある一国家が東洋の一角に存在することを、西洋社会に紹介する一種のルポルタージュにすぎないことはいふまでもない。だが、それと同時に、Mandeville は中国を素材にして誇張と想像をまじえながら一個の理想国を描いていることも、また、否定出来ない。

およそ、ほとんどのユートピア文学が、その中に鋭い現実批判を含んでいるように、Mandeville の中国も手酷しい現実批判を含んでいる。彼の場合、批判の鋒先は明らかに当時のヨーロッパ文化、特にローマ法王下の中世キリスト教に向けられているといえることができる。そのことは以下に述べる二、三の彼の記述から、容易に推察するこ

とができる。

大汗の祖先にまつわる伝説として Mandeville が伝える話の中に、汗は、もともと、ノアの3人の子供のうち最も呪われた子として生まれたが、長じるにおよんで、その力を増し、後年、サラセン人の先祖となった兄のセムや、またイスラエル人やヨーロッパ人の先祖となった弟のヤベテよりも「最も勢力があり最も富裕」な人物となったという話⁷⁾ がある(下点に筆者)。これは説明を加えるまでもなく、未開国中国が、“ヨーロッパ人”によって代表されるヨーロッパ文化よりも、また“イスラエル人”によって代表されるキリスト教文化よりも、立派なものであることを仄めかしたものであるとみてよかろう。また、別なところで「彼(大汗)はカタイ〔シナ〕王国にイオンと呼ばれるローマよりも巨大な都市を建設した」⁸⁾ (下点に筆者)と書き、大胆にローマ法王庁の勢力を揶揄している。さらに、キリスト教の偏狭なものの見方について、

彼ら(中国人)によれば、自分たちは、ふたつの目で見るが、キリスト教徒は片目でみるという。それは、キリスト教徒を彼ら自身のつぎに聡明で利口だと考えているためである。⁹⁾

と皮肉ってさえいる。

われわれは、この「旅行記」が一篇の異国趣味あふれる単なるルポルタージュとして当時の人々に読まれたのか、あるいは、上述のように、当時の宗教や社会に対する強烈な諷刺として読まれたか知る由もないが、ただ、ここで覚えておきたいことは、虚々実々相半ばするこの半架空的「旅行記」の出版によって、中国の名が広く西洋にひろまり、東洋へ強い関心を強く呼び起したということである。

この「旅行記」の原典はフランス語で書かれ、大体1366年から1371年までの間に出版¹⁰⁾されたが、出版後ただちにラテン語訳、ドイツ語訳、英語訳が相ついで世にで、一躍、旅行文学における空前のベストセラーとなった。15世紀はじめには、既に数種類の英語版が流布し、¹¹⁾ 現在、英語版の写本だけでも30種類以上も残存しているという。¹²⁾ この高い普及率から、中国の名が当時いかに広範囲に西洋社会の中にひろまっていたか容

易に想像することができよう。

このように、14世紀は Mandeville の中国紹介により、一般英国人の東洋への視野は急激に広がった時期であったが、つづく15世紀は、相対的にみて、英国の中国への関心は、非常に薄らいだ時代だといえる。1453年東ローマ帝国を破滅させたトルコ人が、ヨーロッパと東洋の通路を遮断したからである。いまだアフリカ経由による東洋航路はおろか、新大陸への航路さえ発見されていない当時としては、ヨーロッパ東部からアジア西部にかけて跋扈するトルコ人の介在こそ、東洋の接触を阻む最大の障壁であった。さらに、直接、中国人と会ったことすらない英国人にとって、トルコ人と中国人の識別がつかず、猖獗なトルコ人の性格を中国人の性格と同一視したため、一般英国人は中国人に対し必要以上に恐怖心と猜疑心を抱く結果を招いた。Mandeville によって、折角、開かれた中国への窓は、このトルコ人の介在のために、しばらく閉ざされなければならなくなったのである。

英国が本格的に中国に関心をよせる^{きざし}兆を見せたのは16世紀後半、正確に言えば Muscovy Company (モスクワ会社) が設立された1553年からである。中世と近世の転換点が事物の超自然的要素を科学の力で剝奪して、その自然的要素を前面に打ち立てることにあったごとく、この年を契機として英国の中国に対する関心は黎明期から発展期へと大きく転換する。すなわち、Mandeville の伝える半架空的な中国の映像は、近代航海技術によってその幻想的ヴェールが剝奪され、中国の素顔が抽出される時代がやってきたのである。勿論、その動機となったのは、通商、国交、など、経済上、政治上の圧力によるものであるが、すくなくとも、16世紀後半の50年は英国が多大の犠牲を恐れず、中国への手がかりをつかもうと、懸命の努力を重ねた冒険の時代であった。

当時、英国で2つの新しい中国への航路が航海家や探險家の間で議論されていた。そのひとつは「北東航路」(the Northeast Passage)、他は「北西航路」(Northwest Passage) と呼ばれるものである。1571年ポルトガルは中国の澳門^{マカオ}に植民地を築き、爾来、ヨーロッパから中国にいた

る航海権を独占、断固として英国の東進を拒んでいた。そのため、英国は止むを得ず北から中国へ通じる新しいルートの発見という至難な北進策を取らねばならなくなった。「北東航路」、「北西航路」というのは、いずれも北廻りで中国に達する航路を指す。前者は陸路ロシアを横断してアジアに入るか、あるいはノールウェーの北端を東へ迂回してロシアの北岸沿いに東進、シベリア経由で中国に達するルートを指し、後者「北西航路」は北太西洋を横切り、アメリカ大陸北岸を迂回して、ベーリング海峡から中国へ入る航路をいう。英国は、まず、「北東航路」の開拓に乗り出し、1553年 Richard Chancellor と Sir Hugh Willoughby の率いる遠征隊を派遣、1556年には Stephen Burrough を、また1557年から64年までは Anthony Jenkinson を派遣したが、いずれも中国はおろか、アジア中部へも足を踏み込むことが出来ず、ただ Jenkinson らはペルシャの一部分に到達しただけに終わった。1580年 Arthur Pet と Charles Jackman の率いる新しい遠征隊が派遣されたが、カラ海附近まで達することが出来ただけで、これまた失敗に終わった。相つぐ失敗のため、この遠征隊のを最後として一応「北東航路」の開拓は打ち切られることとなった。一方「北西航路」の方は、1576年 Sir Humphrey Gilbert が *A Discourse of a Discoverie for a New Passage to Cataia* を出版してこの航路を中国への最短コースとして紹介したため、多くの期待が寄せられたが、Gilbert 自身も1579年、実地踏査に赴き失敗。これより先、Martin Frobisher は1576年から78年まで3回にわたって「北西航路」に挑んだが不成功に終わった。また John Davis は1585年から87年まで3回にわたって遠征を試みたが、せいぜいグリーンランドの西、バフィン島附近まで達しただけで、とうとうこの航路による中国到達の夢も実現することは出来なかった。かくして、寒さと悪天候が連続する北東・北西両航路の開拓は、より装備の整う後年の開拓にゆだねねばならなくなったのである。

このような航路発見の努力は、ただちに出版界に反映し、中国への関心に拍車をかけるにいった。まず、1579年、長らくスペインに居住してい

た英国商人、John Frampton は、名著 Marco Polo の「東方旅行記」をスペイン語からの重訳で出版紹介したのをはじめ、遠く各地へ遠征や踏査に赴いていた航海家や旅行者たちの航海記や旅行記が当時の出版界を賑わすようになった。そのうち、中国に関係のある主なものを挙げると、上述の Sir Humphrey Gilbert の *A Discourse of a Discoverie for a New Passage to Cataia* (1576) や George Best の *A True Discourse of the late Voyages of Discoverie for the finding of a Passage to Cathaya by the North-West under the Conduct of Martin Frobisher, Generalle* (1578) などがあるが、なんといっても、この種の出版物で当時の代表作といえば、Richard Hakluyt の *Principal Navigations, Voyages, Traffiques, and Discoveries of the English Nation made by Sea or over Land to the Remote and Farther Distant Quaters of the Earth at any time within the compasse of these 1500 years*、および、彼の後継者 Samuel Purchas の *Hakluytus Posthumus, or Purchas His Pilgrimes* を挙げねばならない。

Principal Navigations は、その表題からもわかるように、古代から伝わる航海に関するいろいろな著述や資料の中から適当なものを選び編集した膨大な選集である。編者の Richard Hakluyt (1552? - 1616) は英国東部の州 Suffolk の牧師で、オックスフォード大学在学中から、旅行文学に興味をもちはじめ、ギリシャ、ラテンの古典語で書かれた古い旅行記はもとより、当時、スペイン語やポルトガル語で出版された新らしい旅行記にいたるまで、広い範囲にわたって旅行記と名のつくものは手当たり次第に読み漁った博覧強記の人である。彼は1582年 *Diverse Voyages touching the Discovery of America* を出版、1587年には第2作 *Notable History containing four Voyages made by certain French Captain into Florida* を世におくって、早くから海洋文学の編集者として、その才腕を高く評価されていた。大作、*Principal Navigations* は、1589年に、二つ折本一巻にまとめられて出版されたが、第2版を出すに当たって、これに新しい材料を加えて、大巾な増補を

行い、二つ折本3巻として、1598年から1600年まで足かけ3年にわたって逐次出版した。

なにぶんにも古今の数ある航海記を集大成したものだけあって、この本は非常に広い範囲から材料を集めている。航海に関する記事はもとより、異国の土地の経済事情や動植物についての記事まで取り入れて、内容的には百科全書のような豊かさをもっている。しかし、なによりも、われわれの注意をひくのは、取り扱われている地域が片寄っていないことである。Sir Richard Greyville や Sir Walter Raleigh, また、Sir Francis Drake などの華やかな活躍で、当時世間の耳目はややともすれば新大陸アメリカにうばわれ勝ちであったが、Hakluyt は、そのような世間の好尚に惑わされることなく、寒さと飢えとに悩まされながら「北東航路」に、あるいは「北西航路」に、中国の魅力に取り憑かれて航路開拓に乗り出した幾多の先輩たちの地味な記事を多数取り入れ、新大陸開拓の重要さと同じくこの東洋開拓の重要さを読者に教えている。彼が取扱っている中国の記事の中には、いままでも紹介した Sir Humphrey Gilbert の *A Discourse of a Discoverie for a New Passage to Cataia* や、1583年と1596年の2度にわたって Elizabeth I 世が中国の皇帝に送った親書2通¹³⁾をはじめとして、単に英国人の書いたものばかりでなく外国人の書いた記事まで、およそ中国研究に必要と思われる資料はほとんど収録してある。

下に引用するのはこの *Principal Navigations* の中に編まれてあるヴェネチアの商人 M. C. Frederick の書いた *Voyage of Master Caesar Frederick into east India beyonde the Indies, Anno 1563* の中国の地誌に関する記述の一部である。幻想的な Mandeville の「旅行記」と同じく、中国の偉大さを称えていることには変わりはないが、Mandeville の時代を距たることおよそ2世紀の間に、中国に関する記述がいかに細くなり、正確になっているかがわかるであろう。

From Malacca to China is eighteene hundred miles : and from China to Japan goeth every yeere a shippe of great importance

laden wite Shilk, which for returne of their Silk bringeth barres of silver which they trucke in China. The distance betweene China and Japan is foure and twentie hundred miles, and in this way there are diverse Ilands not very bigge, in which the Friers of Saint Paul, by the helpe of God, make many Christians there like to themselves. From these Ilands hitherward, the place is not yet discovered for the great sholdnesse of Sandes that they find. The Portugals have made a small cities neere unto the coast of China called Macao, whose church and houses are of wood, and it hath a bishopricke, but the customs belong to the king of China, and they goe and pay the same at a citie called Canton, which is a citie of great importance and very beautifull two dayes journey and a halfe from Maccao. The people of China are Gentiles, and are so jealous and fearefull, that they would not have a stranger to put his foote within their land: so that when the Portugals go thither to pay their custome, and to buy their marchandize, they will not consent that they shall lie or lodge within the citie, but send them forth into the suburbs. The countrey of China is neere the Kingdom of great Tartaria, and is very great countrey of Gentiles and of great importance, which may be judged by the rich and precious marchandize that come from thence, then which I beleieve there are not better nor in greater quantitie in the whole world besides.¹⁴⁾

編集者という特殊な立場にあったため、Hakluyt は直接、自分の中国に対する意見を吐くことは許されなかったが、*Principal Navigations* に収録した記事は、すべて中国に対して理解と好意に満ちた記事であることからみて、彼は中国および中国人に相当興味と好感を懷いていたことは疑がない。エリザベス朝という英国が世界に雄飛を試みた歴史の一時点にあって、おおらかな国際的精神をもって貴重な航海記や旅行記を多数われわれのために残してくれた彼の貢献は大きい。文学史家 George Sampson も *Principal Navigations* を評して、

Hakluyt's great compilation preserves for us a noble and valiant body of narrative literature of the highest worth, both for its own sake and for its interpretation of the Elizabethan age¹⁵⁾

と、その文学史上における価値を称たえ、19世紀の英国の碩学 J. A. Froude もこの書を“the Prose Epic of the Modern English nation”¹⁶⁾ と歴史上からその価値を高く評価している。

Hakluyt によって着手された航海記の蒐集は、その後 Samuel Purchas (1575?—1626) によって受け継がれ、さらに大きく集大成された。1625年出版された *Hakluytus Posthumus, or Purchas His Pilgrimes, contayning a History of the World, in Sea Voyages and Lande Travells, by Englishmen and others* 4巻がそれである。彼はケンブリッジ大学を卒業後、Hakluyt と同じく聖職につき、Essex 州の Purleigh やロンドンの St. Martin 教会で牧師を勤めていたが、この間 Hakluyt が従事していた旅行記編さんの仕事に興味をもち、もっぱら旅行家、航海家、宣教師などの外国見聞記を蒐集、将来、旅行文学者になることを夢見ていた。上述の大作を出版する前に、彼は *Purchas His Pilgrimage, or Relations of the World and the Religions observed in all ages and places discovered from the Creation unto this Present* (1613) および *Purchas His Pilgrim; Microcosmus, or the Historie of Man* (1619) を出版して、既に旅行記編集者として世間の注目を浴びていた。

Hakluytus Posthumus は、上述の *Purchas His Pilgrim* に収録した記事やまた Hakluyt が遣した資料、それに The East India Company (東印度会社)の公文書などを材料として編さんされたものである。編集の仕方は Hakluyt の *Principal Navigations* と同じであるが、中国に関する記事の中には Joao Perreria をはじめ、Fernao Mendez Pinto や Nicolo de Conti など、比較的新しい旅行家や探検家の記事をより多く取り入れていること、また、中国に長らく宣教師として滞在していた人たち、たとえば中国へはじめてポルトガルの宣教師として入国したドミニカ派の修道僧、Gaspa da Cruz や、中国にはじめ

てイエズス会を創設したイタリアの宣教師 Matteo Ricci などの書いた記事が多量に収録されていることが目立つ。特にこれらの宣教師たちが報じる記事は、当時の知識人の中国観をあらわすものとして興味が深い。そのいくつかを以下に引用してみよう。Gaspa da Cruz は

Though that the Chinas commonly are ill-favoured, having their faces and noses flat, and are beardlesse, with some few hairs in the points of the chinne: . . .¹⁷⁾

と、中国人の容貌の特長をとらえ、

China is almost all a well husbanded Countrey: for as the Countrey is well inhabited, and people in abundance, and the men spenders, and using themselves very deliciously in eating and drinking, and apparell, and in the other services of their houses, especially that they are great eaters, every one labourerth to get a living, and every one seeketh wayes to earne their food, and how to maintayne their great expences. A great helpe to this is the idle people to bee much abhorred in this Countrey, and are very odious unto the rest, and that labourerth not shall not eate, for commonly there is none that doe give almes to the Poore; wherefore, if any poore did aske almes of a Portugal and he did give it him, the Chinas did laugh at them, and in mockage said: why givest thou almes to this which is a Knave, let him goe and earne it...¹⁸⁾

と、中国人の勤勉な性質を特に称たえている。文中で「働こうとしない者は、食べることもしてはならない」という“テサロニケ人への第2の手紙”の一節をひいて中国人の勤勉な性格を説明していることは、著者が宣教師であるだけに興味が深い。中国の婦人の“てん足”はよほど宣教師たちを驚かせたようで、Matteo Ricci はこのことを次のように述べている。

Their women are all low, and account great beauty in little feet, for which cause from their infancy they bind them straight with clothes, that one would judge them stamp-footed: this, as is thought, devised to make them house-wives.¹⁹⁾

また、当時、Ricci と共に中国でイエズス会の活動を助けていたスペインの宣教師 Didaco de Pantoja も、この“てん足”に驚異の眼をむけ、

One of the greatest ornaments that the Women have, is, to have verie little feete, and they are so little, that they goe verie badly, and alway they seeme to goe as they would fall. I could not know the cause, nor the Chinois themselves know not the originall occasion, why this is counted for a beautie: albeit some say, it began not for a comeliness but onely with a purpose to cut off all occasion from them of going abroad.²⁰⁾

と、書いている。

特に、われわれの注意をひくのは中国茶についての記事である。中国茶は英国海軍士官 Samuel Pepys が1659年9月25日の「日記」に、“I did send for a cup of tee, (a China drink) of which I never had drank before . . .”²¹⁾と書いているように、17世紀後半から英国内で中国茶を飲む習慣が流行したのであるが、恐らく英国に、はじめて中国茶の存在を教えたのは、下に引用する *Hakluytus Posthumus* の中に収められている Matteo Ricci や Gaspa da Cruz の記事ではあるまいか。

. . . I cannot passe by some rarities; as their shrub whence they make their drinke *Cia*. They gather the leaves in the Spring, and dry them in the shadow, and keepe it for daily decoction, using it at meates, and as often as any guest comes to their house, yea twice or thrice, if hee make any tarrying. They sup it hot, bitterish to the palate, but wholesome; not of ancient use, for they have no ancient Character in their bookes for it. . . the Chinois put the leaves themselves into the hot water, which they drinke, leaving the leaves behind.²²⁾

と、Ricci は書き、Gaspa da Cruz もこの風変わりな飲物について

Whatsoever person or persons come to any mans house of qualitie hee hath a custome to offer him in a fine basket one Porcelane or as many as persons are, with a kinde of drinke which they call *Cha*, which is some-

what bitter, red, and medicinall, which they are wont to make of a certaine concoction of herbes somewhat bitter: with this they welcome commonly all manner of persons that they doe respect, be they strangers or be they not; to me they offered it many times.²³⁾

と、客をもてなすのに茶をもってする中国の風習まで述べている。このほか箸や壁紙など中国で日常使われる品物について多数の記事がこの Purchas の *Hakluytus Posthumus* に収録されている。したがってこの本は単に中国の風物を英国に紹介するだけではなく、ひいては中国との貿易を促進させる大きな役割を演じたことは疑いない。

総じて、Hakluyt および Purchas の航海記は、当時、盛り上りつつあった Elizabeth 朝のナショナリズムを代表するものであり、そのいずれもは、直接には中国の開拓を目的として編さんされたものではないが、英国の中国への発展を大いに促がす結果となった。Hakluyt の *Principal Navigations* は1600年、The East India Company (東インド会社) の設立を促がし、また、Purchas の *Hakluytus Posthumus* は1636年、John Weddell を隊長とする遠征隊を遠く中国の海へ送り込み、^{マカオ} 澳門貿易を促進させる要因となったのである。したがって、Hakluyt および Purchas の「航海記」は英国の中国に対する関心を、北東、北西両航路の探索時代から、貿易発展の時代へ大きく前進させる機軸となった点意義深かい。

以上みてきたように、16世紀後半において、中国は、航海記や旅行記といった、いわゆる applied literature の分野で華やかに取り上げられ、英国人に親近感をもたれるようになったが、一方、劇や詩などの pure literature の分野では、中国は未だ東洋の一角を占むる遠い存在であった。Elizabeth 朝から James I 世へとつづく世代は、英文学史上、最もきらびやかな1頁を飾った時期であったにも拘わらず、劇作家や詩人たちの眼は、澎湃として湧き上ったルネッサンスの思潮に眩惑され、彼らの想像力はもっぱらギリシャローマの古い世界に閉じこもり、東洋という新らしい世界へ延びることは殆んどなかった。したがって、

この時代における純文学作品のうちで、中国を直接に取り扱った作品は殆んどないといってよからう。Petrus Perondinus の *Magni Tamerlanis Scythiarum Imperatoris Vita* や、スペインの作家、Pedro Mexia の *Silva de Varia Lection* を素材として、波乱に富むスキト生まれの羊盗人の一生を描いた雄渾な詩 Christopher Marlowe の傑作、*Tamburlain the Great* (1590)にしても、その背景は小アジアの一部が取り入れられただけで、中国本土は無視されており。また、英国ロマン派の巨匠 Samuel Taylor Coleridge が「万心のシェクスピア」(myriad minded Shakespeare) と称たえた William Shakespeare でさえ、中国についての真の知識は欠けていたようである。数十篇にのぼる彼の戯曲のうちわずか2カ所²⁴⁾、*“Cataian”* (中国人) に対する言及があるだけで、中国は彼にとってまったく“閉ざされた国”であった。しかも、彼のいう“Cataian”(中国人)の意味は、一種の軽蔑を意味する言葉、「詐欺師」あるいは「不正直者」を意味する言葉として用いられているのである。このような中国に対する冷淡な文壇の風潮は、一時代のちに世に出た清教徒の詩人 John Milton にも反映している。彼の不滅の叙事詩、*Pardise Lost* (1667)において数カ所、彼は中国の風物や地名に言及している。たとえば

But in his way lights on the barren Plains
Of *Sericana*, where *Chineses* drive
With Sails and Wind thir cany Waggonlight:
(III, 437-439)

と、順風を背にして「とう」製の車を操やつる中国人のことを歌い、同書の10巻以降では、「中国沿岸」のことを‘the rich Cathaian Coast’ (x, 292-293) とか、「北京」のことを‘*Cambalu*, seat of Cathaian Can’ (XI, 388) とか、あるいは‘*Paquin of Sinxan Kings*’ (XI, 390) と歌っているが、これらの Milton の中国への言及は、彼の中国に対する関心を示すものというよりは、むしろ中国がいかに地理的に遠隔の地であるかを示す比喩として用いられているにすぎない。

純文学を代表する当時の作家の中国に対する態度は、このように、冷たいものであったが、彼ら

のうち、少数ではあるが、Francis Godwin (1562-1633) や Robert Burton (1577-1640) のように、中国に少なからぬ関心と憧憬を寄せていた作家がいたことを忘れてはならない。

Francis Godwin は、終生、南 Wales Llandaff および Hereford で牧師をしていた人であるが、死後出版された彼の科学小説 *The Man in the Moone* (1638) は、物語の背景の一部を中国に置いているために、われわれの興味をひく。

主人公 Domingo Gonsales はスペインの軍人であるが、ある日、自分が飼っている ‘Gansas’ (野性の白鳥) が意外に強い力をもっていることを知り、この力を利用して飛行することを計画する。1599年、たまたま、彼は襲ってくる海賊から逃がれようとして、早速、この白鳥の力を借りて空へ飛び立つが、白鳥は、彼を安全な場所へ運ぶかわりに、11日間の飛行の末、月世界へと運ぶ。彼はそこで月世界の人々の歓待を受け2ケ年間滞在、1601年帰国の途につくが、地球に達すると、そこは彼の故郷スペインではなく、‘Paquin’ (北京) に程近い高山の頂上であった。空を飛んできたものだから中国人から彼は魔法使いとして怪しまれるが、やがて疑いも解け、彼はここでも中国人から歓待を受ける。北京に滞在中、彼は中国がいかに広大な国であり、人口稠密な国であること、また多数の方言が存在すること、‘clock’, ‘watch’, ‘dial’ といったいろいろな種類の時計が、既に、ヨーロッパの宣教師たちによって中国の宮廷に紹介されていることなどを知り、最後に Pantoja 神父たちの努力で故国スペインに帰り着く、といった筋の物語である。

著者 Godwin は、この小説を書くにあたって中国に関する知識を当時の出版物から得たことは疑いない。特に、この小説の中に出てくる ‘Pantoja 神父’ というのは、さきにもふれたように、当時、北京で活躍していたスペインの宣教師 Didaco de Pantoja であることは間違いない。恐らく Godwin は、なにかの機会に Pantoja 神父の北京での宣教活動を知り、それ以来、彼は中国へ強い関心と憧憬を抱きはじめ、その結果、月の世界を舞台とするこの小説に、敢えて北京を取り入

れたものと思われる。この本ははじめ匿名で出版されたが、非常に好評を博し、1768までに既に4ケ国語に翻訳され、その版数も25版を重ねたという。²⁵⁾

一方 Robert Burton の中国の言及は、彼が書いた異色作、“憂うつ症に関する医書” *The Anatomy of Melancholy* (1621) にみられる。オックスフォード大学 Christ Church Library にある古今の稀書を読み漁って書き上げたといわれるこの本は、3部にわかれ、第一部 (‘The First Partition’) では憂うつ症の定義、原因、兆候、特質などを論じ、第二部 (‘The Second Partition’) ではその治療法を、第三部 (‘The Third Partition’) では特殊なタイプ——たとえば、恋愛や宗教などによる——の憂うつ症状とその治療法について、述べたものである。

さて、著者 Burton はこの膨大な本を書くにあたって、当時の碩学 Francis Bacon の例にならない、使用する文献や資料を主に古代ギリシャやローマに求めたが、Bacon と異なる点は、彼は Bacon のように西洋の資料のみに頼らず東洋の資料を縦横に使って論述していることである。したがってこの *The Anatomy of Melancholy* には随所に中国および中国人についての言及がある。

彼は、まず、中国の国情を診断して、中国は古代ローマの Augustus 時代に匹敵するほど、「憂うつから解放」された恵まれた国の一つであると断じ、²⁶⁾ 国情がそのような健全となる原因は、「乞食や徒食家」の存在を許さない勤勉な中国人の国民性によるものであることを指摘²⁷⁾、勤労意欲がいかに健全な精神を、ひいては明るい国家建設に必要なかを述べている。中国の明朗さは、またその単純な生活様式によるものであるとして、彼は漢方医学を例にとりてそのことを次のように説明している。

... their [Chinese] physicians give precepts quite opposite to ours, not unhappy in their physic; they use altogether roots, herbs, and simple in their medicines, and all their physic in a manner is comprehended in an herbal: no science, no school, no art, no degree, but, like a trade, every man in private is instructed of his master.²⁸⁾

彼は、また、独身主義が憂うつ症の大きな原因を作るものであるとし、中国における早婚の習慣をとりあげて、西洋における修道院制度を皮肉り、

Augustus Caesar made an oration in Rome *ad coelibes* [to the bachelors], to persuade them to marry; some countries compelled them to marry of old, as Jews, Turks, Indians, Chinese amongst the rest in these days, who much wonder at our discipline to suffer so many idle persons to live in monasteries, and often marvel how they can live honest.²⁹⁾

と述べている。

さらに彼は、人々が政治や社会の制度について不満をもつことは、「憂うつ症」をひき起す大きな原因であるとして、身分や門閥に頼ろうとする世襲貴族のもつ不合理な特権に、酷しい批判を試みている。そうして合理的な社会を創り出すには、世襲貴族制をもたない中国に学ぶべきものが多くあるとして次のように述べている。

Now go and brag of thy gentility. This is it belike which makes the Turks at this day scorn nobility, and all those huffing bombast titles which so much elevate their poles; except it be such as have got it at first, maintain it by some supereminent quality of excellent worth. And for this cause, the Ragusian Commonwealth, Switzers, and the United Provinces, in all their aristocracies, or democratical monarchies (if I may so call them), exclude all these degrees of hereditary honours, and will admit of none to bear office, but such as are learned, like those Athenian Areopagites, wise, discreet, and well brought up. The Chinese observe the same customs; no man amongst them noble by birth; out of their philosophers and doctors they choose magistrates: their politic nobles are atken from such as *moraliter nobiles*, virtuous noble; *nobilitas ut olim ab officio*, *non a natura* [nobility, as of old, is derived from office, not from birth], as in Israel of old, and their office was to defend and govern their country in war and peace, not hawk, hunt, eat, drink, game alone, as too many do.³⁰⁾

Burton の中国に関する記述の大部分は、Matteo Ricci の資料をもとにして書かれたものである。だが、われわれの興味をひくのは、以上の例からも察せられるように、彼は、従来行われていたような地理学的あるいは地誌学的立場から中国をとらえ、これを紹介することをせず、中国のもつもっと内面的な要素、すなわち、その文化や社会制度に焦点をあて紹介していることである。特に彼がここに取り上げている noble savage 的な素朴で単純な中国人の国民性ならびに合理主義的な中国社会の在り方は、合理主義の思想が風靡した18世紀の時代思潮と合致し、英国における中国研究の中心課題となったものである。この意味から断片的であるとはいえ、*The Anatomy of Melancholy* においてなされた彼の中国紹介は、やがてきたるべき英国啓蒙時代の中国熱をより立てる端著を開いたものといえよう。

× × × × × × × × × × × × ×

以上、大ざっぱであるが、われわれは、Mandeville の時代から17世紀前半までおよそ3世紀間、英国が中国という異質の文化に接して、それをどのように受け入れたか、その受容の仕方をみてきた。そして英国の中国に対する関心は、まず好奇心から出発して、通商、そして文化へと、3つの顕著な転換を印しながら発展してきたことがわかった。すなわち Mandeville の「旅行記」によって点火された英国の中国に対する情熱の炎は、15世紀において一旦、下火とはなったが、多くの航海記や旅行記の出版によってすぐに再燃し、Hakluyt や Purchas などの好意的態度と相まって、英中両国間に通商関係を生み、さらに Burton によって中国文化の受容という域にまでひろがった。17世紀前半では、したがって、中国はもはや地理上の *terra incognita* ではなく、東洋を代表する立派な文化国家として認識されはじめたわけである。そしてこの認識は、あと半世紀を経て18世紀に入ると、『中国趣味』という新しい情熱となって、文学、工芸、美術、造園など広い分野に具体的な形となってあらわれ、英国文化史に異彩な一頁を飾ることとなる。

〔附記、本文中の引用文は、はじめ全部原文のまま引用し、その統一をはかろうと思ったが、手許にある Mandeville の「旅行記」はエヴリマン双書で内容も少なくなく、テキストとして最も定評のあるエガートン版の邦訳が最近、大場氏によって完成されたので Mandeville からの引用文は同氏の邦訳を使用させていただいた。なお Hakluyt の *Principal Navigations* および Purchas の *Hakluytus Posthumus* は天理大学図書館のものを使用した。ここにそのことを記して感謝の意を表わしておく〕

〔註〕

- 1) J. マンデヴィル著 大場正史訳「東方旅行記」 206頁。
- 2) 上掲書 179頁。
- 3) 上掲書 169頁。
- 4) 上掲書 212頁。
- 5) 上掲書 182頁。
- 6) 上掲書 212頁。
- 7) 上掲書 188頁。
- 8) 上掲書 195頁。
- 9) 上掲書 182頁。
- 10) Albert Bough(ed.), *A Literary History of England*, p. 267
- 11) *Ibid.*, p. 267
- 12) H. S. Bennett, *Chaucer and the Fifteenth Century*, p. 199
- 13) Richard Hakluyt, *The Principal Navigations*, V, pp. 451-452 XI, pp. 419-421
- 14) *Ibid.*, V, pp. 405-406
- 15) George Sampson, *The Concise Cambridge History of English Literature*, p. 185
- 16) J. A. Froude, 'England's Forgotten Worthies' in *Short Studies on Great Subjects*, p. 153
- 17) Samuel Purchas, *Hakluytus Posthumus*, XI, p. 511
- 18) *Ibid.*, XI, 499
- 19) *Ibid.*, XII, p. 450
- 20) *Ibid.*, XII, p. 400
- 21) *The Diary of Samuel Pepys*, I, p. 97
- 22) Samuel Purchas, *op. cit.*, XII, p. 417
- 23) *Ibid.*, XI, p. 513
- 24) *Twelfth Night*, II, iii, 80 および *The Merry Wives of Windsor*, II, i, 148
- 25) Douglas Bush, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century*, p. 55
- 26) Robert Burton, *The Anatomy of Melancholy*, I, p. 79
- 27) *Ibid.*, I, p. 91
- 28) *Ibid.*, II, p. 222
- 29) *Ibid.*, III, p. 246
- 30) *Ibid.*, II, pp. 139-140

参 考 書 目

1. Baugh, Albert C. (ed.) *A Literary History of England*, Appleton-Century-Crofts, New York, 1948
2. Bennett, H. S., *Chaucer and the Fifteenth Century*, Oxford, 1947
3. Black, J. B., *The Reign of Elizabeth*, 1558-1603, Oxford, 1952
4. Burton, Robert, *The Anatomy of Melancholy*, intro. by Holbrook Jackson, 3 vols. Everyman's Library, Dent, London, 1949
5. Bush, Douglas, *English Literature in the Earlier Seventeenth Century, 1600-1660*, Oxford, 1952
6. Feiling, Keith, *A History of England*, Macmillan, London, 1952
7. Froude, J. A., *Short Studies on Great Subjects*, selected and intro. by David Ogg, The Fontana Library, Collins, London, 1963
8. Hakluyt, Richard, *Principal Navigations*, 12 vols. James MacLehose, Glasgow, 1905
9. Hughes, E. R., *The Invasion of China by the Western World*, Adam & Charles Black, London, 1937
10. Lewis, C. S., *English Literature in the Sixteenth Century*, Oxford, 1954
11. Mandeville, John, *The Travels of Sir John Mandeville*, Dent, London, 1928
12. Marlowe, Christopher, *The Plays of Christopher Marlowe*, ed. Leo Kirschbaum, Meridian Books, The World Publishing Co., 1962
13. Marlowe, Christopher, *The Works of Christopher Marlowe*, ed. C. F. Tucker Brooke, Oxford, 1953
14. Milton, John, *Complete Poems and Major Prose*, ed. Merritt Y. Hughes The Odyssey Press, New York, 1957
15. Mish, Charles C., (ed.) *Short Fiction of the Seventeenth Century*, Anchor Books, Doubleday, 1963
16. Pepys, Samuel, *The Diary of Samuel Pepys*, intro. by Richard Garnett, 2 vols. Everyman's Library, Dent, London, 1950
17. Purchas, Samuel, *Hakluytus Posthumus, or Purchas His pilgrimes*, 20 vols. James MacLehose, Glasgow, 1905-1907
18. Sampson, George, *The Concise Cambridge History of English Literature*, Cambridge., 1949
19. Shakespeare, William, *The Complete Works*, ed. Charles Jasper Sisson, Odhams, London, [n. d.]
- 20) 金子建二著「東洋文化西漸史」富山房、昭和18年
- 21) J. マンデヴィル著 大場正史訳「東方旅行記」平凡社、昭和39年。